
ISV ~ RED&BLUE外伝~

甘楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISV～RED&・BLUE外伝

【Zコード】

Z0846V

【作者名】

甘楽

【あらすじ】

現在執筆中の小説、「ISV～RED&・BLUE～」の外伝集です。

基本的にネタだらけですが、過去編のみは本編に沿った内容になっています。

思いついた時に投稿しますが、本編のほうもよろしくお願いします。

第9話エフ編 セシリア▼S本氣紅也（前書き）

はい、第一話です。

第九話、▼Sセシリアのエフ編です。

紅也がチート+凶暴化しています。

第9話 E編 セシリアム本氣紅也

「フル・スキン全身装甲とは…珍しい機体を使いますね。」

「そりゃ?俺の所属してる所じゃ、むしろメジャーなんだが。」

オルコットは、既に空にいた。その田は、相変わらず「ひりひりを見下したようであるが、しつかりと俺の田を見据えている。

「…改めて聞くぜ。お前の相手は、誰だ?」

「決まりますわ。今私の敵は、田の前にいるアナタ 山代紅也だけですわ!」

「ふつふつふ……」

その言葉に、俺は笑つて返す。

「な…何がおかしいんですの!?」

「今の俺は、タダの山代紅也じゃない…。そりゃさしづめ…本氣紅也だ!…！」

「…はあ。」

あきれた様子のオルコット。だが、果たしてその余裕が、いつまで続くのか…。

「本編では出せなかつた、」の俺様の本氣…テメエに見せてやるぜえ!…！」

「ちょつ、アナタ、口調が…」

「試合、開始!…！」

「ヴォワチュール・リュミエール…起動…！」

言うが早いが、レッドフレームは残像を生み出し、高速移動を始める。セシリアはレーザーライフル、『スター・ライトMK・?』を構えるも、こちらを捉えきれない。

…さて、読者の皆様も薄々気付いたはず。今の紅也の機体は、本編未出の『レッドフレーム改』である。現時点ではまだ開発されていないこの機体だが、このE.F編ではチート待遇である。

「くつ…行きなさい、ブルー・ティアーズ…！」

セシリアはゲリットを展開。倍以上に増えた砲口が、レッドフレームをつけ狙う。しかし、レッドフレームは止まらない。体をひねり、左右に動き、時には回転し、軽々とレーザーを避けていく。

と、状況に変化が起こる。唐突に加速が止まり、レッドフレームの背部ユニット、タクティカルアームズ？Kが変形したのだ。そう、逆三角形のデルタフォームから、大きく上部が開いた形へと

「チャンスですわ…！」

ビットに光がたまり、レッドフレームを碎かんとレーザーを臨界させるも…。

「マガノイクタチ、起動！！」

光が消え、ブルー・ティアーズからエネルギーが放出される。レッドフレームが、ブルー・ティアーズのエネルギーを吸い出したのだ。

「そ…そんなことが…」

「おつと、呆けてるヒマはないぜーーー！」

タクティカルアームズが分離し、変形する。2つに割れた剣のような形の、中央部に銃口が見える。それは、まるで…

「タクティカルアームズ？Ｋ、アローフォーム！…コイツを喰らいなー！」

寄るな、触るな、くたばれ、阿呆！！」

声に合わせて一発、二発、三発、四発。光の矢が放たれ、曲がり、空中に浮かぶ4機のビットを破壊する。

「ゲームの曲射！？わたくしでも、まだできませんのに…。
「ボケてる場合か、阿呆！！」

スキだらけのブルー・ティアーズに、レッドフレームが襲いかかる。その手に握られたタクティカル・アームズは、いつの間にか巨大な剣へと姿を変えていた。

下から上へ、振り上げる。とっさに構えたスター・ライトMK・？は、あっさりと両断された。しかし…セシリ亞は不敵に笑う。

「おおいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよー！」

腰部のアーマーが外れ、レッドフレームへと向かう。まさに必中の距離。紅也は急上昇して回避を試みるも、ビットは直角軌道で追尾し レッドフレームの姿は、爆炎に呑まれた。

しかし。

「甘えよ、クソ虫ー！」

レッドフレーム、健在。その手には、一振りの日本刀が握られている。

右手にあるはガーベラ・ストレート。彼の師匠が作りし愛刀。左に構えるはタイガー・ピアス。師の元師匠が鍛えし宝刀。

ビームをも切り裂くその刃は、あっさりとブルー・ティアーズを引き裂いたのだ。

これでセシリ亞は、全てのビットを失った。

再び迫るレッドフレーム。セシリ亞も、近接武装を展開しようとす るも…

「遅え、双破斬ー！」

一本の刀で切り上げ、後、たたき落とす。絶対防御が発動し、ブルー・ティアーズのエネルギーは大幅に削られた。

「きやあああああー！」

体制の立て直しを図るセシリア。しかし、全ては既に遅く。
眼前には、赤き大剣が迫っていた。

このタクティカルアームズ？Ｋは、レッドフレームから遠隔操作で
きるようになつていて。

最後の一機のブルー・ティアーズが発射されたとき、紅也は剣に搭
載されたスラスターで急上昇した。その後剣から手を離し、二本の
刀を抜いたのだ。その剣は、紅也の後ろから接近しており、双
破斬を放つた直後にブルー・ティアーズを追撃したのだ。

直撃。地面に叩きつけられるセシリア。そして、ブルー・テ
ィアーズは光となつて消滅する。

「散々偉そうにしておいて、このザマかよ、クソ虫が。
…偉い奴が強いんじゃねえ、強い奴が偉いんだ。分かったか、阿
呆。」

その言葉を聞いて、セシリアは意識を失つた……。

record!

- ・セシリアル分撃破
- ・セシリアルダメージ撃破

第9話 IF編 セシリアルS本氣紅也（後書き）

IF編は、本編が進んだらまた書きます。

本編の次話は、本日20時に投稿です。では、またそちらで会いま
しょう。

第40～42話 I・F編 ラウラ・S本気兄妹（前書き）

…と、いうわけで I・F 編です。

予告より早い投稿ですが……まあ、いいですかね？

第40～42話 IF編 ラウラvs本気兄妹

一回戦第一試合。その対戦カードは……。

ラウラ・ボーデヴィッヒ&篠ノ之巻vs山代紅也&山代葵

「残念だつたな、一夏が相手じゃなくてよ。」

「ふん。貴様を倒せば同じことだ。」

「だから、私たちを倒すなんて、無理に決まつてんじやない。どうしても倒したかつたら……そうね、自慢の部隊を率いて、全員でかかつてきたら？」

「……たとえ勝ち田がなくとも、勝ちに行かせてもらひー。」

全員に気合いが入る。会場の空気は既に、戦場のそれであった。

「覚悟しろ、山代紅也！そして、山代葵！」

ラウラのその言葉に対し、彼らは……

「「ふつふつふ……」」

不敵に笑う。

「な、何だ！？何がおかしい？」

突然のことであたふたするラウラ。それほどまでに、彼らの雰囲気は異

質であった。

「山代紅也?」「山代葵?」

「ちがうな(わ)」「

「俺は」「

「私は」「

「本氣紅也だ(葵よ)……」「

バーン!!

背景に、爆発が見えた。

「な……何を言つてゐる!?」「

「またか!? またなのか!?!」「

ラウラは本氣でワケが分からぬといった表情をして。簞は、前回の悪夢を思い出して震え始めた。

そんなこんなで。

試合が、始まる。

「早速行ぐぜ! マガノイクタチ!!」

紅也のレッドフレーム改の背部バックパック、タクティカルアームズ? Kが変形、V字の形になる。大きく開いたV字の先端が簞に向

けられると。

バリバリバリバリ！！

「なつ！？ エネルギーが！！」

幕の打鉄は、そのエネルギーを大きく減らされ、慌てて後退する。
そう。背中に装着されたマガノイクタチが、エネルギーを吸い取つたのだ。

「ふう。満腹だぜ。」

吸い取られたエネルギーは、レッドフレーム改のエネルギーとなる。
彼のエネルギーは、既に天元突破しているようだ。

「何をしている！ 邪魔だ！」

幕の後ろから、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンが出現。6本のワイヤーブレードを駆使して、紅也を幕からひきはがし、レールカノンで狙いをつける。

別に、紅也一人でも対処は容易なのだが、これはチーム戦。

ガガガガガガガ！

上空から、ガトリングが斉射される。それに気付いたラウラは、左手を伸ばし、AICを発動させる。降りそそぐガトリング弾の半分は、確かに停止した。しかし

「くっ！？」

残りの半分、緑色の閃光は、停止せずにラウラに襲いかかった。ラウラは、その襲撃者を見やる。そこにいたのは、いつものブルーフレームではない。

本来のブルーフレームより、一回り大きい頭部。背中には、紅也と類似した、しかし形態の異なる青い翼。脚部には大型のナイフシースがあり、そこには一本のアーマーシュナイダーが収まっている。肩には、大型の追加スラスター。これにより、本来のブルーフレームとは桁違いの運動性能を獲得している。

そう。この機体は、本編未登場の『ブルーフレームセカンドリバイ』であった。

今は、バックパック『タクティカルアームズ?』のガトリングアームを分離し、右手に握っている。そこからは、今も一色の弾丸が吐き出され続けていた。

そう。ビームと実弾、二色の弾丸を。

「ホラホラ、動きが止まってるわよ?
「くつ……黙れ!!」

レールカノンを、今度はブルーフレームへと発射する。弾丸はブルーフレームの胴体へと直撃し、爆炎が上がる。

「ははは!大したことないな!」

しかし、煙の中から現れたのは、傷一つないブルーフレームだった。

トランスフェイズ装甲。

装甲表面に着弾の衝撃があると、装甲下のPS材に通電し、強度を増す装甲だ。

PS装甲と異なり、フェイズシフトダウンを氣付かれない、消費エネルギーを抑えられるといった利点がある。ブルーフレームセカンドリバイは、これを装甲の一部に採用しているのだ。

いかにレールカノンといえど、TP装甲にはダメージを防げられない。

「私からも言わせてもらつわ。『大したことはないなー』」

この時点でもラウラが詰んでるような気がするが、気にしてはいけない。

両肩と背中のバーニアが、一気に火を噴く。通常の3倍の瞬時加速。瞬きする間にブルーフレームが迫る。その腕には、一本の片刃剣、タクティカルアームズ・ソードアームが装着されている。これは、タクティカルアームズ？の変形の一つであり、合体して大型剣として振ることも、分離して振ることも可能な武器だ。

「死になさい。」

放たれる斬撃は左右1つずつ。レールカノンと、翼の一部がはじけ飛ぶ。

さらに、加速に押され、ラウラのIISは大きく体勢を崩した。ワイヤーブレードの制御が乱れ、レッドフレームを逃がしてしまった。

「おのれ！」

今度はそのワイヤーを、ブルーフレームへと向けるが

「あら、何それ。攻撃？」

「？ 何を言つて……んなつ！？」

そう。ワイヤーブレードの先端が、無くなっていたのだ。
しかもワイヤーを斬ったのではない。ブレード部分が、きれいに両
断されていた。

「…あいつか…！」

視界の隅で、紅也が右手の刀を見せつけるかのように振っていた。
その足下には、6つのブレードの先端が転がっている。…つまり、
ラウラは、最初から遊ばれていたのだ。

が、それ以上に遊ばれていたのが、簫であつた。

今も果敢に刀を振るも、紅也はそちらを見ずに、左手の刀一本で相
手をしている。

「くっ、このつ！」

「簫一。簫はどうするー？」

「…どちらでもいいわ。」

「じゃ、落とすか。」

ヴォワチュール・リュミールを起動。勢いのまま簫を蹴り飛ばし、
アローフォームで一射。ビーム矢は簫の腹部に命中し、シールドエ
ネルギーを奪い去る。

これで2対1。プラント 所謂ピンチだ。

そもそも、ラウラの武装はプラズマ手刀のみ。これでは、一人同時に戦うことはできない。

「ねえ。質問いいかしら？」

「何のつ！つもりだつ！」

二刀VS二刀。ラウラの表情に余裕はないが、ブルーフレームはまだ余力を残している。

「私と紅也、どちらに倒されたい？」

「！ ふざけるなああ！！」

ラウラが葵を睨む。すると、ブルーフレームの動きが停止した。A.I.C.を使ったのだ。

「これで終わりだ！」

勝利を確信するラウラ。ブルーフレームの胴体を斬りつけたが、実体ダメージは無い。ならば、と今度は腕を狙う。ラウラは気付いていた。あの装甲は、胴体にしか無いと ！！

その洞察は正解。ただ一つ残念だったのは、葵がわざわざA.I.C.にかかった理由を考えなかつたことか。

ズガガガガ！

再びガトリングが、シュヴァルツェア・レーゲンを襲う。

「な！？ 何故だ！ あれは、貴様が捨てたはず……」

……が、モニターに映つた映像を見て驚愕する。

ガトリングアームが自立飛行をし、ラウラの背に向けて射撃を行つていたのだ。

「自立兵器……だつたのか……。」

シュヴァルツェア・レーゲン、沈黙。

これで決着がついた……かに思えたが。

「ああああああああああ！……！」

ラウラの機体に紫電が走る。ドロドロに溶けたシュヴァルツェア・レーゲンはラウラを包み、その体を再構成する。そつ、バチシステムが発動したのだ。

現れたのは、漆黒の戦乙女。織斑千冬の「コピー」が、一人の前に立ちふさがつた。

「……ま、本編では一人で戦つたけど。」

「…紅也にあげる。」

「さんきゅ。」

青い機体が下がり、赤い機体が前へと出る。手にしたのはタクティカルアームズ・ソードフォーム。

エネルギーは奪わない。せつかくだから、普通に戦つてみたいとい

う、紅也の思いの表われだつた。

二人が動く。

太刀と大剣が激突する。

雪片からエネルギー刃が飛び出し、そのまま剣を両断するかに見えた。

が、対ビームコーティングを施されたタクティカルアームズに、そんなものは通じない。

エネルギー刃をかき消し、刀本体を両断し、一瞬で敵を無力化する。

「さて、お仕置きの時間だ。」

剣の先が、二つに分かれる。

タクティカルアームズ・ワークフォーム。

本来は資材の切断に使われるそれだが、武器としての性能も極めて高い。

「どうする？このまま切るか、それとも射るか。」

黒いISが、逃れるためにもがく。が、この武装に、IS程度では対抗できない。せめて、パワーエクステンダーでも搭載していれば、状況が違つたかもしれないが……。

ぎりぎりぎり。

締め付けを強くしていく。装甲にヒビが入り、ISから力が抜けていく。

「ハツハアー！命乞いつてヤツをやつてみろよー。

最後は何だ？ママか？恋人か？それとも織斑先生か？今頃走馬灯見て、生まれる前からやり直しての最中か？」

実際には、こうなる前に走馬灯みたいなものを見ていたのだが、そんなことは誰も知らない。

バリ……

ISの表面が割れ、隙間からラウラの姿が見える。それを確認した紅也は、ISを地面に投げ捨てた。

「フン……。ガーベラを使うまでもない。」

叩きつけられたISは、ひびが全身に広がつていき、ゆっくりと光へ変わっていく。

「まだまだ暴れ足りないけど……。まあ、楽しかったわ。次は、もつと強い相手だといいわね。」

「たしかに弱過ぎたな。：どうする？今から俺達で殺し合つか？」

「次があつて……たまるか！！」

地上から一人を見ていた筈は、物騒な会話を続ける一人に、そんなつっこみを入れていたのだつた……。

第40～42話 I・F編 ラウラ・S本気兄妹（後書き）

ネタ色の強い話でした。

次は……後継機編かな？ いつになるかはわかりませんが。

後継機編 その1（前書き）

はい、また投稿します。

本編1-1話の後の、ネタ時空にて。

白ズボとよく似た名前の、あの機体が登場します。

後継機編 その1

本編1-1話の後。

「なあ、一夏。お前、そんな機体で大丈夫か？」

「そんな機体つて…。白式のことか？確かに、装備が雪片一本つてのはキツイけど、千冬姉もこれで世界一になつたからなあ。」

「ステイシスやアンサンブルは、誰が使ってもランク1になれる機体じゃないぞ。お前は、織斑先生じゃないんだ。」

「最初の例えは良く分かんないけど、俺じゃ、雪片は使いこなせないってことか？」

ややむすつとした一夏。俺、山代紅也は、そんな一夏にある提案をする。

「そうじやないさ。ただ、いつ言いたいんだ。

別の機体、動かしてみる気はないか？」

s.i.d.e・織斑一夏

「と、いうわけで、これがお前の新・専用機だ！」
「早っ！」

某月某日。場所は第一アリーナ。山代、篠、セシリ亞、俺を集めた

紅也は、布に包まれた機体を持ってきていた。

「さあ、カバーを取つてくれ！そして、その田に焼き付けるがいい！」

言われたとおりに布を引っ張る。すると

「ここ」、『金』が、いた。

金。金ぴか。豪華絢爛な、金色。眩しいほどの純金を纏つたE.S.が、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「ああ！白式の後継機、『百式』だ！」

金ぴかのそれ。無機質なそれは、なぜか俺以外の誰かを待っているように見えた。

「…百式？」

「ああ。白に一を足して百。安直だけど、いい感じだろ。」

「…かなり派手だな。」

上からセシリア、紅也、篠だ。山代は無言。名前の由来には納得したが……なぜだろう。素直に納得できない自分がいる。

「とりあえず、装着してみてくれ。おっと、試作機だから、初期化すんなよ。」

「わかった。やつてみるよ。」

百式に背中を預ける。受け止めるような感覚がしてから、すぐに俺

の体に呑ませて装甲が閉じた。

かしゅつ、かしゅつ、といつ空氣を抜く音が響く。そして、機体から『何か』が流れ込んでくる。

『認めたくない…………な。若ひゑの……ひとこい。』

『当ら……ければ、どうとこいとは……』

『見……る……私にも……が見える……』

『アボ……、ロベ……ト、行くべ……』

『ま……だ……まだ終わらんよ……』

「…………か、ちか、一夏……」

「まつ……つ……篠、俺は……」

急に現実に戻される。……たつきのは、何だつたんだ？

「や……やあへ、コアネットワークが電波を拾つた、とか？」

紅也が、眼をそらしながら答える。……正直、滅茶苦茶怪しい。

「……正常。百式、起動を確認。」

「やつぱつ、全身装甲ですのね。」

山代ヒセシコアの興味は、既に百式に移ったようだ。もつ少し心配してくれよ。

「じゃあ、まずは武装を開いてみよう。一夏、武装一覧を表示してみてくれ。」

紅也の指示に従い、俺は武装リストを開く。「おお、白式と違つて、たくさんあるな。

「まずは近接武装だ。呼び出してくれ。」

「おっしゃあ！ 来い、ビームサーベル！』

手の中に現れたのは、金色の短い棒。…アレ、失敗？

「…ビームサーベルは、イメージが大事。思い浮かべて。」

「どうやら、これでいいらしい。山代の言葉に従い、イメージする。

何をイメージしよう？

そうだ、やはり刀がいい。決して朽ちず、折れず、敗北しない。そう、千冬姉の雪片のように。今、ここに、あの刀があればじみのある形だった。

ブウン！

先程まで握っていた棒から、刃が飛び出す。それは、俺にとつてない

「…やはり、雪片になつたか。一夏め、白式への執着が強すぎるとさ。

「

おい紅也。聞こえてるぞ。そんなに俺を、コイツに乗せたいのか。

「ビームですって！？」イギリスでも、レーザーが精一杯ですのに…
セシリ亞もセシリ亞で落胆している。なんだ、ビームつてそんなに
すごいのか？

「…次、ビームライフル。」

「ビームライフルですってええええ！？」

「セシリ亞、うるさいぞ。」

外野がうるさい。集中できないだろ。

再び名前を言って、武器を召喚。今度は銃か。

「じゃあ、ターゲットを出すから、それを狙って打つてみろ。」

紅也が8になにやら入力すると、アリーナに3つの立体映像が浮かび上がる。

にアームが一本、砲台が一つづついたような形の何か。これがターゲットか？

一発目、外れ。二発目、外れ。三発目、外れ。ああくそ、当らねえ。

「やはり、一夏さんは射撃が得意ではありませんのね。」

「機体がブレオンだから、しづがないだろ？。これから慣れればいいさ。」

四発目、命中。五発目、外れ。六発目、外れ…

「止め。次、クレイバズーカ。」

IISサイズのバズーカが展開される。ターゲットは再び三機。

「また射撃か？一夏には向いてないのではないか？」

「なつ…舐めるなよ、第…」このぐらい、俺だつて…

今まで以上に集中し、的を狙う。…ロックオン。

発射された弾頭は、命中寸前で破裂し、散弾となつて的を破壊した。

「お、早いな、一夏。もうモノにするとは。」

二機目、三機目も破壊する。命中率100%。

…すげえな、セシリシアは。こんなものを、動く的に当ててんのか。

「じゃあ、最後のお楽しみ…メガバズーカランチャーを使え…！」

やたらと紅也のテンションが高い件。

言われたとおりに出してみると…百式の一倍はあるであろう、超長
いライフルが出現した。

「なんといつ…大きさだ…」

「あんなものが…あるなんて…」

「…大艦巨砲。」

「いや…漢のロマンだ…！」

四者四様の反応。かくいう俺も、かなりの感動を覚えていた。

「よし、じゃあ、ターゲットを撃墜だ！！狙え、一夏！」

アリーナのバリアの天井付近に、何かが映し出される。

ハイパー・センサーで拡大。見覚えのある形…って、白哉じゅねえか！

「『ハ、紅也！ターゲットの変更を要請する。』

「了解した。…つと、コレでどうだ？」

再び拡大。青い機体色、背部の四枚のフイン・アーマー。コイツほどではないが、大きなライフル

「わたくしのブルー・ティアーズではありますんのぉおー？紅也さん、ターゲットを…」

ズキュウウウウウン！…！

「おし、命中。」

「やるではないか、一夏。」

「一夏さんん！？」

セシリ亞、絶叫。

「いや、だつてよ。この間戦つたばかりだから、つい、反射的に…な？」

「『な？』じゃありませんわよ…うう…一夏さんなんて…知りませんわあ…！」

涙を流し、走り去るセシリ亞。それを紅也が呼び止め、何やら耳打ちする。

…何だ？なにか、良くないことが起こつそうだ。

「最終段階、戦闘試験。」

「ふふん、どこからでもかかつてきなさいな、一夏さん。」

アリーナで向かい合ひのは俺とセシリ亞。…どうしてこうなつた…？
元凶だと思われる紅也は、ニヤニヤしながらこちらを見ている。第
は…あ、皿をそらした。

「ルールは」の間と同じ。始め。」

山代が、唐突に開始を告げる。するとセシリ亞が距離を取り、四機
のブルー・ティアーズを放つ。
急に、頭が痛くなつた。

『 ガンダムは伊達じやない…』

『 シャア…』

『 行け、フィン・ファンネル…』

様々なシーンが、脳裏をよぎる。その中の一つ、飛び回る白いビッ
トが、現在の景色と重なつて…

『 …アムロ…』

俺の意識は暗転した。

報告。

試作型IS、百式について。

全武装性能、規定値をクリア。十分に実戦に耐えうるものである。特に、ハイパー・メガランチャーの精度、威力には目を見張るものがある。

しかし…戦闘支援プログラム、「C・A・チップ」に欠陥あり。相手が特定の武装を使用した際、操縦者の意識を乗っ取り、暴走する危険あり。今後、さらなる改良が望まれる。

改良案として、C・A・チップに代わる支援プログラムと、背部への砲戦型バックパックの装備を提案する。

山代 紅也

オーストラリア国営企業モルゲンレー所属

「うう…わたくしは、オチ担当なのですか…?」

「……アーネスト。」

続く。

後継機編 その1（後書き）

…「白波」と「田波」って、似てるよね？

そんな話でした。

後継機編 その2（前書き）

遅れましたが、投稿です。

予告通りの後継機編。アレが、進化して帰ってくる

！

学年別トーナメントが終わって数日。いきなり「私の嫁」宣言を受けた俺は、毎日のよつてにラウラに付きまとわれていた。今の所は背弄拳の応用でのらりくらりと逃げ続けるけど……。いつまで通じるか、はつきりこつて分からぬ。

そんなある日。珍しく普通に（やつ、待ち伏せなどせず、普通に、だ！）ラウラが部屋を訪ねてきた。普段と違うその様子に、何かを感じとつた俺と葵は、いつものように無碍には扱わず、部屋に招き入れ、話を聞くのであつた……。

「……で、何なんだ？話つてのは。」
「うむ。頼みがあるのだが……。私に、IISを貸してくれないだろうか？」
「…………はあああああつー…？」

常識とか遠慮とかそういうものを一切抜きにしてラウラの言葉に、俺達は珍しく叫び声を上げてしまつた。

「な……一体、なんでそんなことを？」
「……事情説明。」
「いいだろつ。実はだな……」

回想中……

『シュヴァルツェア・ハーゼ所属、ラウラ・ボーデヴィッヒです。本日はどういう用件でショウカ?』

ある日、IIS学園の私の部屋に、予期せぬ訪問があった。事前の連絡も無しに、私を訪ねてきたその男は、ドイツ軍の制服を纏っていた。

『君がボーデヴィッヒ隊長か。話には聞いていたが、その若さで隊長とは、大したものだ。』

：ああ、自己紹介がまだだつたな。私はドイツ軍作戦本部所属、オットー・アイヒマン大佐だ。』

『はっ、大佐殿でありますか。失礼しました!』

『はは、楽にしていい。とりあえず、座りたまえ。』

本来、上官の前で自分だけ座るなど言語道断であるが、命令であれば仕方がない。私は自分のベッドに腰掛ける。すると、それを確認するようにこちらを見た大佐は、私の向かいにあつた、シャルロットのベッドに腰かけた。

そして大佐は、ゆっくりと口を開く。

『学園での生活はどうかね?』

『……は?』

私は、一瞬何を聞かれたのか分からなかつた。

なにせ、大佐だ。私にとっては、雲の上の存在に等しい上官だ。

それが、なぜ、たかが一特殊部隊の隊長の生活を、気にするのだろうか?

そんな疑問が表情に出てしまつたのか。私から不信感を読み取つた

大佐は、次の言葉を発した。

『ああ、別に他意はない。ただ、軍人として純粹培養されてきた君が、普通に高校生活を送っているのかが心配でね。』

『そ、そうありましたか……。普通の生活、というのがどういうものかは分かりませんが、大きな問題も無く、過ごしているつもりであります。』

『それは何よりだ。』

で、次の質問だが……。周囲の人間とうまく「ミミコニケーション」はとれているか？あんなことがあつたんだ。多少のトラブルもあつただろ？』

あんなこと

つい先日起こつた、VTシステムの事件だ。

あの時、私の心の弱さが原因で、嫁や、一夏や、シャルロットたちを危険な目に合わせてしまった。だが、彼らは私を受け入れ、仲間として扱ってくれている。

それは、きっと、とても幸せなことなのだろう。

『 大丈夫です。ここのは、私を受け入れてくれました。かつて、彼女らを“拒絶”した私を……だから で、ですから、問題ありません。』

失敗した。

今の態度は、間違いなく上官に接する態度ではなかつた。

が、大佐殿の反応は違つた。

『はつはつは。なるほど、ずいぶん丸くなつたものだ。クラリッサの言つとおりだな。』

どうやら、君をここへ派遣した判断は、間違つていなかつたらし

い。
』

そう言って、本当に嬉しそうに笑みを浮かべる。その表情を見て、思わず私は

『ありがとうございます、大佐殿。』

笑顔を浮かべ、やう答えたのであつた……。

回想終了

「うう……グスツ……ええ話や～。」

「何故、関西弁？」

「だつて、大佐……男だ！漢だよーー！」

さすが、ガウで特攻しただけのことはあるな～。」

「大佐殿は特攻などしていいが。」

それはさておき。

「……で、それが何で『弓を貸す』っていう話になるんだ？』

「ああ、それは……」

回想・続き……

『それで、確認したいことがあるのだが。』

『？ 何でしようか？』

『予定では、ここ数週間は大きな行事はない、といふことだが……。』

本当かね。』

『はい、間違いありませんが……。』

『そうか。それは良かつた。』

大佐は、まだ笑顔を浮かべている。

先程までとなんら変わりのない表情なのだが、私は、それにどこか不吉なものを感じた。

そして、その予感は、すぐに現実のものとなつた。

『では、君の専用機、シュヴァルツェア・レーゲンを、しばらく預からせてもらひ。』

『……は？』

最初とはまったく違う驚きで、私は言葉を失つた。

和やかな会話が続いていた中での、突然の不意打ちだった。

『……な……何故……？』

かろうじて絞り出したのは、そんな一言。

が、それに対する返答は、至極あっさりとしたものだつた。

『V-Tシステムによる、ISへの影響を調べなければならない。なあに、ほんの一週間ほど預かるだけだ。没収などではないから、安心しなさい。』

『そ、そうでしたか……。それは』

良かった。

そう言おうとして、思わず言葉に詰まる。

それは、ある約束を思い出したためだ。

台無しになってしまった、学年別トーナメント。そして、一夏との決着。

一夏と和解はしたもの、決着はつけたい。そう思ったラウラは、一夏に再戦を申し込んだのだ。

それも 教官の立会いのもとに。

その際、Jバ言られた。

『なあ、私が立ち会うのは今回だけだ。再戦は認めん。いいな?』

再戦の日時は5日後。

それ以外の日では、教官に自分の力を見せることができない。
そんな日に、自分のIISがないなど……

『どうした、ボーテヴィイツヒ隊長?』

『……！はつ！何でもありません！…』

『？ ならばいいのだが……。では、IISを。』

『う……大佐殿。その……もう少し待つてもらうことは……？』

『生憎だが、これは既に決定事項だ。私の一存で変更はできんよ。』

『…………！了解しましたっ！…』

今度Jバ回想終了……

「これが、昨日の話だ。」

「ああ、だから昨日は襲撃が無かつたんだな。」

「…納得。」

「で？ 何で俺に頼みに来たんだ？」

「ああ。このことをシャルロットに相談したら、嫁に聞いてみると
うに言われたのだ。」

「何でも、前に一夏にエリを貸したことがあったと聞いたんだが。」

「ああ……。後継機編・その1の話か。

「そう……ことになら……手はある。

「…いいぜ。ちゅうづび、稼働試験を頼まれてたやつが一機あつたん
だ。それを貸すぜ。」

「…いいのか？」

「ああ。試合当面を、楽しみにしてるよ。」

「恩にきるぞ、紅也！ 礼として、今夜は一緒に……」

「…出でけ。」

s.i.d.e・織斑 一夏

一週間前、ラウラに再戦を挑まれた。

なんでも、千冬姉の立会いの下で、正式に決着をつけたいらしい。

この間、あの空間で話をして、ラウラと俺とのわだかまりは溶けた。だから、今度の試合は恨みによるものではなく、「けじめ」をつけるための戦い。それを受けないなんて、男がすたるつてもんだ！

で、今日は試合当日。なんだけど……

「……遅えな、ラウラの奴。」

先に白式をまとってアリーナに出たのは良かつたものの、ラウラはまだ準備中みたいだ。

……何でも、ISが本国で整備中だから、代わりの機体で戦うとか。万全の状態じゃなければ、再戦の意味がないと思うんだけど……。そんなに千冬姉に見てもらいたかったのか、ラウラ。

「 待たせたな。」

オープンチャネルによる通信。発信源は知らないコアだが、声からして、間違いなくラウラ

……知らないコア？

そこに引っかかりを覚え、俺は相手をチェックする。すると、白式から情報が送られてくる。「コアナンバー・100」と……。

……訂正。知ってるコアだ。

何となくオチが読めたから、覚悟をしてゲートに視線を向けると……『奴』は、勢いよく飛び出してきた。

「待たせたな、一夏。再戦を始めるぞ。」

何度見ても眩しい、金色の全身装甲。

右手に持つ銃は大型化し、さらに破壊力を増したように見える。気になるのは、肩から生えた二門の砲塔。左肩のは普通だが、右肩はどう考えてもガトリング砲だ。

最後に、左肩に書かれたマーク……。前回、俺が使ったときには『百』と書かれていたそれは、『百改』と新たに書き直されていた。

ここまできたら、嫌でも気付く。

この機体は、前に紅也が持つてきた『白式の後継機』、百式の改良型であると……。

戦闘が始まる。

「まずは小手調べだ。…喰らえ!」

先制の一撃は、ラウラのものだった。

左肩にマウントされた、パルスレーザー砲を発射。威力こそシユヴァルツェア・レーゲンのレールカノン ブリッツ に劣るも、弾速はそれをはるかに上回る。

そんな一撃を、一夏は 余裕のある動きでかわした。

「甘いな！銃口を見てれば、飛び道具の発射方向なんてすぐ分かる

！…つて、紅也が言つてた。」

「ふつ。それもそうだな。だが、それは銃口が一つだけの場合だ。」

今度は右肩のガトリング砲から、光の粒が降りそそぐ。

そう、光だ。

一夏の予想通り、これはガトリング砲であった。

しかし、誤算があるとすればただ一つ。ここから発射された弾丸は、鉄塊ではなくビームだったという点だ。

「ちつ！ 紅也が用意した機体だ！ そのくらい、予想しとくべきだつたか！？」

武器の向きには十分注意していたつもりだったが、いかんせん弾速が速すぎた。最初の数発が白式の肩に命中し、その装甲に穴をあける。が、そのころには既に白式は加速し、ビームのシャワーから抜け出していた。

「くつ……やるではないか！ 私は嬉しいぞ！…」

「そりゃどう……もつ！」

会話をしながらも、一夏は自身に迫る火線から逃げ回る。しかし、回避した先にラウラがパルスレーザーを撃ちこむため、一切の油断が出来ない状況だった。

（くそつ……。元の機体は万能機だったけど、こいつは砲戦特化かよ…）

まずい と、一夏は思つ。

こじは完全に敵の間合い。対して白式は、接近戦しかできない。

しかも、かつてあの機体を使った一夏には分かる。

あの機体に、雪片式型と同レベルの格闘戦武装、ビームサーベルが搭載されていることが。

「これすら避けるか！ならば、火線を増やすぞ……。」

ラウラはとうとう、ビームライフルまで持ちだしてきた。これで合計3つの凶悪兵器が、一夏に狙いを定めたことになる。

が、一夏の顔に浮かんだのは、絶望などではなかつた。

（来たつ！）

一夏は気付いていた。あれだけの火力が、長続きするわけがないことに。

前に、紅也がビームサーベルを使わず、日本刀を振る理由を尋ねたとき、こう言つていた。

『ビーム兵器は恐ろしく燃費が悪い』……と。

その問題を解決するために作られたのが、この間シャルロットが使つたような『カードリッジ式』のビームらしいけど、まだ未完成らしい。現に、この前のマグナムは試合中に壊れたしな。

そして、あの3つの武器は、カードリッジ式などではない。このままいけば、いずれ火線を維持できなくなり、砲撃は薄くなるだろう。

その時が、唯一のチャンスだ。

「くつ……陸ちろー！」

ラウラの顔に、焦りの表情が浮かぶ。

いまや一夏は攻撃も防御も捨て、回避に専念していた。そして避けきれないときは、一番威力の低いパルスレーザーに突っ込む。

そして、試合は急展開を迎える。

何度も分からぬ、ビームライフルによる射撃。銃口に注目していると、そこが一瞬チカツ……と光り、すぐに消えたのだ。

「なつ……！」

エネルギー、エンブティーだ。

待ちに待つチャンス。一夏は雪片を実体化し、そこにエネルギーを流し込んでいく。

零落白夜、発動。

一夏は調子を確かめるかのように左手を握り、開き、そして再び雪片式型を掴む。

そして瞬時加速。一気にエネルギーが減っていくが、どうせ最後の攻撃だ。そんなものは気にしない。

「くつ……。」

正面で、ラウラがビームサーベルを引きぬく。

でもな、ラウラ。その武器は、エネルギーがなきゃ使えないんだぜ？

光の剣となつた雪片を振りかぶる。狙うは一撃必殺。頭から股下までを両断するつもりで、一気に振り抜く！

この試合での勝敗を分けたのは、機体を熟知していたかどうか。幸運にも、俺はあの機体を知っていた。そしてラウラは、機体に慣れる時間が不十分だつた。俺達二人の差なんか、それだけだ。

「國語」

卷之三

「な……なんで……？」
田の前にはラウラの姿は無く、雪片の光も消えていた。
そして、慌てて後ろを見ると、そこにはピンクの光剣を振り抜いた姿勢で静止する、ラウラの姿が。

おかしい!

ラウラにはもう、エネルギーは残つてなかつたはずだ。

だからこそ一夏は賭けに出た。唯一の勝機、接近戦に全てを賭けたのだ。

「うーん、まだだ。

そう言ってラウラはビームライフルに持ち替え、さつきと同じように銃口を光らせる。そしてもう一度ライフルを構えると、今度はし

つかりビームが発射された。

つまり、ラウラはビームの出力を最小にした状態で発射し、エネルギー切れを装つたのだ。
そして勘違いした一夏は、ロンドよりしへラウラに接近戦を挑み、敗北したのだ……。

報告。

試作型IS、百式改について。

肩への追加装備により、火力の大幅な上昇に成功。圧倒的な弾幕によつて敵の動きを完封し、一方的な戦闘を開いた。唯一の弱点は燃費の悪さであるが、これは『カーデリッジ式』の導入によつて改善可能である。

しかし、3基の射撃装備を同時に扱うのは困難であり、操縦者には一定以上の技量が求められることとなつた。一刻も早く、戦闘支援AIを完成させることが必須である。

ただ、本機は当初の『高機動のビーム搭載機』というコンセプトを若干逸脱しており、元となつた『百式』には、まだ発展の余地があると考へられる。

オーストラリア国営企業モルゲンレー^テ所属

山代 紅也

後継機編 その2（後書き）

えー、一応言つておきますけど、これもまたE-F展開の一いつです。本編の合間の出来事ではありますんで、あしからず。

後継機編は、しばらくお休みです。次の「あの機体」を出すために
は、本編である機体を開発することが必須条件なので……。

過去編その1 セシリア×葵 ジン評価試験（前書き）

久しぶりの番外編です。

今回は「過去編」の名の通り、本編で実際に起こった出来事を書きました。

本編2話と8話に存在する、葵の髪型の矛盾。その理由も説明されます。

過去編その1 セシリア・ス葵 ジン評価試験

「これは、まだ世界にビーム兵器がなかつた頃のお話…。

N·G·I 1017 ジン。N·G·Iが、モルゲンレー・テの技術提供の元に作った試作型全身装甲ISのうちの一機である。今回、そのテストパイロットとして選ばれた少女。名をアオイ・ヤマシロといった。そして、

「アオイ。一人でイギリスに行くなんて、ホントに大丈夫か? やっぱり、俺がついていくか?」

「心配ない。コウヤ、レッドフレームの最適化中。ここにいて。」

彼女を心配そうに見つめる少年は、彼女の双子の兄、コウヤ・ヤマシロであった。二人はまさに瓜二つであり、葵が髪を切つたら、見た目は完全に一致するだろう。

「でも、あのN·G·Iが作った試作機。コンセプトもウチとは全然違うんだ。気をつけないと…」

「しつこい。…私は、大丈夫。」

「う…アオイ…」

一言で兄を黙らせた少女は、そのまま飛行機に乗り込む。
…が、過保護な兄は、この程度で引き下がるはずは無かった。

飛行機は、イギリスに到着する。

出迎えなどない。なぜならここは、既に敵地。

アオイの目的。それは、ジンの性能試験……つまり、戦力評価であった。

イギリスの試作ISと模擬戦を行い、その改良点を見つけ出す。
…とは言われているものの、その実態は、研究者たちのエゴだろう。
自分たちの作った機体が、どの程度の完成度なのか…。それを知りたいのだ。

モルゲンレー^テとしても、N・G・Iの技術力を知りたいのだろう。
ここに、二社の思惑が一致した。

そこで白羽の矢が立つたのは、BT試験兵器の実験を行っているイギリスであった。
互いに試作機を持つ立場。性能評価を持ちかけたら、あっさり話がついた。

…本音としては、相手より自分の技術が上だ、と見せつけたいだけなのだが。

ちなみに、アオイがテストパイロットに選ばれた理由は一つ。

今回のテストを担当する、イギリス側の代表候補生が、アオイと同じ年だからだ。

そこまで対抗意識をみせなくても、いいだひつ。やれやれ。

これを引き受けたにあたり、アオイは条件を出した。

ひとつ。ジンの各種装備一式を、モルゲンレーテに譲渡すること。

ふたつ。性能評価を行うジンを、改造する許可を出すこと。

二つ目に関しては、正しい評価ができないとしてN・G・Eが渋つ

たが、「このままでは負ける」と断言したアオイの一言で、泣く泣

く条件を呑んだ。

そして、今。

俺、コウヤ・ヤマシロは、改造されたジンを台車に乗せて運んでいる。

…え、オーストラリアに残ったんじゃないかつて？

アオイが心配なんだよ！幸い、俺の機体、レッドフレーム（正式名称はメイン・バトル・フィギュアだが）は、使用可能な状態だ。そこで、脚だけ部分展開し、その上から立体映像を重ねて投影することでき、「がつしりした大人の職員」のフリをしてヘリに乗り込んだのだ。

と、モルゲンレーテのローハン入りトラックを発見。

担当者に書類を渡し、ジンとともにそのまま乗りこむ。

こちらスネーク。潜入ミッション、成功だ。

イギリス、IS開発局。

ここが、今回の試験の会場だ。

研究所とアリーナが同じ敷地内にあり、データを取るためにISを改良するにも便利な構造をしている。

俺は、アオイが使うピットにジンを運び込み、ようやく元の姿に戻つた。

これ以上続けたら、帰りに使うエネルギーが足りなくなる。

それに、たとえ誰かに見つかっても、アオイのフリをすれば大丈夫だ。

…さて、模擬戦の開始まで、あと一時間。少し、敷地内を偵察

いや、そり、散歩だ。散歩しよう。

自分にそう言い訳し、俺はピットを後にする。

ああ、そうそう。ジンの設定は、アオイ以外にはいじれないようにロックした。妨害なんてさせねえよ。

なんとなく足音を消しながら、廊下を歩く。

それと同時にレッドのセンサーで、アオイの位置も探る。万が一にも、鉢合わせしてはいけない。説教二時間コースは確定だ。

…うん、この辺にはいない。まずは、研究所の方へ向かったようだ。センサー解除。警戒レベルを引き下げて、再び施設をまわる。

そして、休憩室に向かつたとき　　俺は、ついに見つかった。

「もしもし、そこあなた。どなたですか？見覚えのない方ですが

…。

声からして、女性。「この職員だらうか？」

前髪を下ろし、田元を隠す。顔はやや伏せて、振りかえる。

そこには、お嬢様がいた。

「いや、だつてなあ。

金髪縦ロールなんて、どう見てもお嬢様だろ。
しゃべり方も、どこか気品がある感じ。なんていうか、こう…。貴族っぽい？

「あの、もしもし？」

「ああ、今度は少し、不信感がこもった声だ。…やばい、早くしないと。」

「……何？」

「やばいー今、モロに地声だった！—修正修正

「まあー質問しているのはこちらですわー！何者ですかーー！」

「……モルゲンレーーテ所属。アオイ・ヤマシロ。」

「ヤマシロ…？ああ、わたくしの対戦相手のーー！」

ええっ！？コイツ、よりにもよって試合の相手かよー。
こりゃヤバい。余計なことを話したら、正体バレるかも…。

「光栄に思つてくださいなーー」のわたくしと、テストとはいえ戦えるなど、あなたの身に余る榮誉ですよーー。」

「知らない。興味ない。」

ああもう、話しかけるな。俺は面倒が嫌いなんだ！

「まあ、何でしじう！その態度は……」

「雑魚と話す時間は無い。」

一方的にそう言い捨て、俺は撤収する。

「なつ……！－いいでしじう－」のわたくしが、自ら、叩きのめして差し上げますわ！－」

そんな捨てセリフを聞きながら、俺は休憩室から逃げ出した……。

そして、試合開始時刻。

俺は、モニターの映像をハックし、離れたところから試合を見ることにした。

イギリスのISは、既に準備完了して、空に浮かんでいる。海のような青い装甲を持つIS。その手には身の丈よりも大きなライフルが握られ、背中には四枚の大きな青い翼がついている。

アレの名称は、ブルー・ティアーズ試作型。

自立稼働し、レーザーを放つ大型砲台だそうだ。…ビットってのは、小型が相場と決まっているが。あんなにデカければ、アオイにとつてはただの的だな。

反対側のゲートが開く。

そこから出てきたのは、青と黒の一色に塗り分けられた、全身装甲のHS ジンだった。

背中には本来の一枚の翼の他に、一つのプロペラントタンクが搭載されている。ここにはジェット燃料が満載されており、機体の速度を一時的に引き上げることができるのだ。

また、装甲のところどころには穴が開いており、徹底した軽量化がなされている。

そう、アオイは、鎧武者のような外見のジンに、速度重視のチューインを施したのだ。

本来の武装である剣は外され、軽量だが切れ味バツグンのナイフ、アーマーシュノナイダーが一本、肩にマウントされている。

足にはスラスターが増設され、全てのスラスターを稼働すれば、本来のジンの3倍近い速度が出せる。その分、操縦のクセが強くなるが…アオイならば問題ない。

手に握られたのは、無反動砲キヤットウス。弾頭は通常弾頭と閃光弾の一種類。一撃離脱を前提としている装備だな。

さらに、頭部のトサカは撤去され、代わりにモノアイが追加された。正面と上部を別々に観測するモノアイは、どこか不気味だ。

「…来ましたわね！アオイ・ヤマシロー！」

「…………」

敵は騒ぐが、アオイはどこ吹く風。元々無口な奴だ。

「宣言通り…あなたが地を這い降伏するまで、徹底的に叩きのめして差し上げますわ！」

そんなこと言つてたつけ？『叩きのめす』だけだった氣がするけど。

「……つむさい。雑魚に興味は無い。」

俺と似たようなセリフを発するアオイ。それを聞いた相手は、口をパクパクさせている。

『それでは、テストを始めて下さい。』

無機質な声が、戦いの開始を告げる。

「～～～！！行きなさい、ブルー・ティアーズ！！」

青いビットが、宙を舞う。

一機はアオイの後方へ。一機は真上へ。三機目はその退路を塞ぐ位置へ。四機目は、アオイの周囲を円軌道で飛び回る。

が、唐突に。

アオイの姿がかき消える。

イグニッショングースト
瞬時加速。それも、超高速の。

ライフルを構え、ビットの操作に集中していたお嬢様（仮）は、その接近に虚をつかれ 否、知覚できずにナイフで突かれ、腹を蹴られ、どごめどばかりに放たれたキャットウスを直撃する。

シールドエネルギー、減少。残り、137。

いきなり大ダメージだ。こりや、決まったか？

「くつ……やりますわね！……ならば！」

お嬢様はビットを呼び戻す。それいざエリのそばに満座になると、一斉に光を放ち始めた。

ビットを固定砲台として利用した、圧倒的な弾幕。それらが、葵の接近を阻む。

「…小癩。」

キヤツトウスの弾頭を変更。無誘導で放たれたそれを、レーザーが撃ち落とす。

瞬間、圧倒的な光が立ち上り、アリーナを包み込んだ。

「なつ！？卑怯ですわ！…これでは、視界が…。
…でも、それはあなたも同じはずですわ！」

確かに。

今の状態じゃ、アオイも敵の姿は見えない。

だが。

アオイなら、記憶を頼りに敵を落とすくらい、簡単にできる。

ポン！ポン！ポン！

聞こえたのは、爆発音のみ。そして光が収まるところ。

「…あらっ。」

そこに四機のビットは無く、残されたのはライフルを構えた青いエスのみであった。

そしてそのまま立っているのは、武装を全て格納した状態のジン。

「ふふふ……ビームセイバー・ビームを破壊しても、このスター・ライトミック
？を破壊するほどの弾丸は、持つていなかつたようですねー！ 実
弾で身を固めるから、弾切れになるのですわ！」

そう言つて高笑いを始めるお嬢様。そして

「喰らになさい!!」

無防備なアオイに、ライフルを向けた。エネルギーが凝縮し、レーザーとしてあふれようとする。それを見たアオイは、人差し指を相手に向け

「お前は既に、死んでいる。」

と、なんとも有名なセリフを放つ。すねび。

何の前触れもなく、突然、ライフルが爆発した。

そのダメージで、シールドエネルギーを失った敵ISは、地上へと墜落していった。

模擬戦は終了。俺は、再び変装し、悟られることなく帰国した。

アオイも、敵操縦者と話すことなく撤収し、ヘリの中で眠ってしまった。

：疲れたのか？いや、時差ボケかな。

後日。

あの時の映像が届いたため、俺はようやく、その試合について話すことができるようになった。

早速、「最後に何をしたか」と聞いてみると、「余裕があったから、ライフルの銃口に爆弾を詰めておいた」との事。

アオイには勝てない。

俺は、改めてそれを実感した……。

過去編その1 セシリア～S葵 ジン評価試験（後書き）

この後、紅也は大きな事件の当事者となります。その出来事があまりに過酷だったため、セシリアとの出会いは覚えてません。でも、ブルー・ティアーズのことは覚えてる。さすが技術者（笑）。

セシリアの最後のアレは、完全にネタです。
次回は…まだ未定です。

過去編その2 ハーム強奪事件（前書き）

久しぶりの投稿です。

エイミーさんが登場したので、あの事件の顛末をば……。

本編未登場のあの人も出ますよ！

過去編その2 ヒーム強奪事件

ジンのトライアルから半年後。

あの後、葵がチューインしたジンは研究のためにN・G・Iに接収され、葵自身もテストパイロットを解任された。

そこで葵はモルゲンレー・テに再び異動し、メイン・バトル・フィギュアのテストパイロットに任命された。

そして、二ヶ月前……。

忘れもしない、あの大事件が起こった。

N・G・Iとモルゲンレー・テの、協力関係の破棄。

多くの技術者は引き抜かれ、技術のほとんどは手に入れられず……。モルゲンレー・テは、設立以来初めての大敗北を喫したのであつた……。

「元々は遙かなる大宇宙を探索するために作られたマルチフォーム・スーツである、インフィニット・ストラトス。白騎士事件をきっかけに世界中に広まつたそれは、当初こそ本来の用途で研究されていましたが、やがてIIS開発を巡る状況は一変しました。」

ラジオ越しに、そんな演説が聞こえてくる。

「宇宙開発のために開発していた初期のIS、通称 type - 0 を狙つたテロ事件。多くの宇宙開発関係者を巻き込んだその事件を契機に、ISは宇宙から遠ざかっていきました……。」

フリーウェイを疾走する車の窓からは、冬化粧を始めたカリフォルニアの街並みが見える。

これで空が見えたなら最高なんだけどな……。あいにく、厚い雲が空への道を閉ざしている。

「……しかし、それは結果として更なるIS開発を促し、今日に至るまでの発展の礎となつたと言えるでしょう。」

車がフリーウェイを下りる。制限速度の上限が下がるが、気にせず今の速度をキープ。

幸い、道に雪は積もつておらず、こんな車でもスリップせずに済んでいる。

「あの未曾有のテロから10年……。我らアメリカのIS開発は、
転換期を迎えました。

……そう、新たなる第二世代機の開発に成功したのです！」

やがて、基地の入り口が見えてくる。

頑丈そうなゲートの前には、銃を持った警備員が二人。車が彼らに近づくと、彼らは手に持つ銃を下げ、ゲートを開く。

「ISの事件で犠牲となつた彼ら、彼女らに対し、冥福を祈りましょ
う。マリア・キッドマン、クラウス・E・ヒュームロス、ロバーク・
スタッフ、クロウ・スタンピード、ニコラス……」

警備員が敬礼し、車が中に入していく。

しかし、車は定められた駐車場へは向かわず、敷地の奥……IS研究所へと向かっていく。

「では、紹介しましょうーーノース・グランダー・インダストリーが開発した、最新鋭の全身装甲型IS……デュエル の登場です！」

目的地に到着した。

ラジオを切り、コートを着込む。

後部座席に乗せてあつた8を掴み、車を降りる。

瞬間。

冷たい冬の乾いた風が、俺の頬を撫でつけた。

「寒うううう……」

並大抵のことじや動じない自信のあつた俺だが、この寒さには驚いた。

「こりゃ……ドイツより寒いんじやないか？」

「ホラ、しゃきつとしなさいーー男の子でしょ？」

運転席に座っていた女が、俺の尻を蹴り飛ばす。しかもつま先で。その乱暴な動作に、叫び声を上げそうになるのを必死にこらえ、やや涙目になりながら振り返る。

「痛つてえな！何すんだよ、母さん！」

「そんだけ元氣がありや大丈夫ね。……じゃ、せつせと装着しなさい。」

「

「はいはい。」

8を握る手に、思わず力がこもる。

実験では何度かやつてることで、実際に使るのは今日が初めてだ。集中し、いつもの感覚を思い出す。あの、体内に、違った何かが生じる感覚を……。

そして。

8が、消失する。

「……成功、ね。」

「よし。第一段階はクリアだね。」

体が感じていた寒さが消失する。

同時に視界がクリアになり、自身の感覚が増幅したような、奇妙な錯覚に襲われる。

「じゃ、入るわよ。」ウヤは平氣だらうけど、私はかなり寒いんだから。」

「……どの口が言つかーどの口がー！」

入り口のカードスロットにカードキーを通して、暗証番号を入力すると赤いランプが緑色に変化し、錠が開いたことを示した。

「失礼しまーす……。」

なーんて、冗談めかして入るも、返事は無い。

……そりゃあそだらう。今ここにいるはずの警備員は、ほとんどが別の基地にいるのだから。

そう デュエルの発表式典の警備に。

さて、そろそろ状況を整理してみようか。

俺の名前はコウヤ・ヤマシロ。オーストラリアの企業、モルゲンレーテに所属する技術者だった男だ。

そう。だつたのだ。

今の俺は、モルゲンレー^テが開発したメイン・バトル・ファイギュアのテストパイロット。そう、戦う技術者だ。……なんてな。

さて、ここで重要なのは、俺が男であるという点だ。

メイン・バトル・ファイギュア、通称MBFは、モルゲンレー^テが開発した第二世代のISだ。しかしISは、女でしか起動できない。ならば、何故俺がテストパイロットなのか？

……答えは簡単。俺のMBF、レッドフレームは、ISじゃないのだ。

コアを持たず、エネルギー源はバッテリー。量子変換や操縦者の生体コントロール以外の機能はほぼ使えない、ISの劣化版。それが、今の俺の機体だ。

そんな俺が、何故オーストラリアを飛び出し、アメリカにいるのか？

それはズバリ……ドロボウするためである。

二ヶ月前にN・G・Iとモルゲンレーテが提携を解消してから、モルゲンレーテはN・G・Iに多くのスパイを送り込み続けた。そう彼らの技術を奪うために。

そのほとんどは捕えられ、その後の行方は分からぬ。だが、それでも数人 警備員や技術者として、N・G・Iにもぐりこむことに成功したのだ。

そんな『潜在的スパイ』のうち一人が、ある情報をキャッチした。

デュエルの発表式典のとき、基地が無防備になると。

それを利用し、モルゲンレーテはビーム兵器の強奪を決行することにした。

今までは、Xナンバーと呼ばれるN・G・Iの新型……デュエルを警戒し、作戦を行うことは出来なかつた。でも今日はそのデュエルもいない。そして、IISのいない基地など……張り子の基地も同然だ！

「とはいへ、警備は十分多いんだけどね……。」

「そりやそりや。IIS、GAT計画の最先端の研究所だもの。」

とりあえずロッカールームに潜入し、工作員から渡された制服に着替えた俺達は、正面切つて堂々と廊下を歩いている。

「ついこの場合、下手にキヨドリつたりコソコソすると、逆に怪しまれるのだ。

もちろん、ダンボールは論外。一度やつてはみたかったけど……またの機会に使用しよう（つまらんシャレだな、我ながら。）

「……で、母さん。とりあえず、口調を直してくんない？その姿で女言葉は、やっぱに怪しいといつか……。」

「あら、『じめんなさい。』こんなんでいいか？」

「何故俺の口調をチヨイスしたのかは分からぬけど、まあ、わざわざよつは……。」

今回、潜入メンバーとして動くのは、スペイを除けば俺と母さんの二人だけ。

しかし母さんは、一度のモンド・グロッソ出場によって完全に顔が割れている。そこで、今は男装して潜入してもらっているのだ。元々そこまで大きくなき胸はサラシで隠し、男物の作業服を着て、名前の由来にもなった長い青髪は、栗色に染めたうえで縛つて三つ編みにしてある。

……まあ、要約すると、デュオのコスプレみたいになつてた。

廊下を歩ぐ、歩ぐ、歩ぐ……。

しばらくするとセキュリティレベルの高い扉に閉ざされた、閉鎖区分の入り口にたどり着いた。

「『じめんなさい。』ベニ、8でロックを解除して。」

「ベニつて何だよ、デュオもどき。」

一度8を分離して、カードスロットと連結させ、暗号解析を始める。様々な文字列が浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返し、パスワードの解読が進む。

「あなたの名前……ユウヤさんの故郷では、漢字で『紅也』って書くんですね。その『紅』っていう字は、『ベニ』とも読めるらしいの。」

「ふうん……だから『ベニ』ね。……まあ、気にいつたかな。」

ちらちらと通路をつかがいながら、解読を進める。パスワードは残り一桁。これなら、すぐこでも扉がほら、開いた。

「じゃあ行くよ、デュオ。」

「ハハハハハ！ 時よ止まれ、ザ・ワールド！..」

「いや……その『DULLO』じゃねえし。」

さて、問題はここからだ……。

最初の警備兵に遭遇。……銃を持っていた。

いくら8を装備してるとは言つても、レッドフレームの装甲を展開してない俺では、あんなものは防げない。

そして母さんもISを持っていない。たとえ内部からの手引きがあつたとしても、この基地にISを持ち込むことはできないからだ。だからこそ、俺が選ばれた。人以上IS未満の装備を持つ、この俺が。

警備員は、俺達をちらりと見ただけで通り過ぎる。…「…」

しまれずに済んだようだ。

しかし、心臓に悪い。

一步間違えれば殺される……。これが現実なのだと、否が応でも思
い知られる。

「なーに弱気になつてんだよ。お父さんなりこのへりに、笑い飛ば
して進むぜ?」

「ああ、あのときのコウヤさん、カッコ良かつたわ~。」

「いや……」こんな所でノロケられても……。何か吐き気が。

いつそのこと休憩室に忍び込んで、特濃ブラックコーヒーでも飲んでこようか。

そんなことを考えりれるへりには、俺にも余裕が出てきた。

「……お、分かれ道だな。」

「…そう、だね……。」

研究室の突き当たりに位置する、一つの分かれ道。
たしかここが分岐点。

右なら格納庫……つまりけば新型のデータを手に入れられるも、
発見されたら命は無い。

左なら武器開発区画……ペーム兵器があるのはいつのまづだ。

「じゃあ、俺は左に行くよ。母さんは手筈通り、陽動をお願いしま
す。」

「死なないでよ。俺はともかく、アオイが寂しがる。」

「安心しなさい、私を誰だと思ってるの?最強無敵のお母さん、ヒ
メ・ヤマシロよ。」

そつ言い残し、母さんは右の通路へと足を進める。俺は左へ。
後ろは振り返らない。

……きっと、母さんは大丈夫だから。

8が持つ機能の一つ、立体映像の投影を使い、自分の姿を大人に変える。

半年前はレッドフレームを部分展開しないと使えなかつたそれは、今や8を持っているだけで使えるように進化していた。まあ、手を離したらおしまいだから、念には念をと8を装着してるんだけどな。

外見は、実際にこの区画に勤めている研究員の一人に。背格好も似ていたので、まあ丁度良かつた。

しかもその本人は、今頃西海岸のコンテナの中で絶賛寝中。後ろから本人登場！なんてドッキリは起こりえない。

なので俺は、だいぶ余裕を持つて研究室にたどり着くことができた。周囲ではISのプログラムを組んでいたり（あれは……可変機か？）、巨大砲塔を作っていたり（なんか、男のロマン砲とか言つてる。）、巨大な実体剣にビーム発信機を取り付けるための議論をしていた（新型のビームサーベルか？）。

「だーかーら！これをつければ、ここからビームが発射できるだろ？まさか、剣からビームが飛んでくるとは思わないだろうよー！」

「バッカ、お前……。ここには普通にビームサーベル用の発信機をつけて、ビーム・実体一つの特性を持たせる方がいいだろうが！」
「いや……操縦者の方で設定をいじって、両方の用途で使えるようにするのはどうだ？」

「「それだ！」」

「よし、早速プログラムを組むぞ！」

「じゃあ俺は、シユゲルトゲベルそのものの設計を見直そう。」「決まりだな！俺は、このプランを上申していくぜ。」

ビーム発信機に取り付いていた三人の技術者は、一瞬にして走り去ってしまった。

残りの技術者は、こちらを見てもいない。ただただ、自分たちの研究に没頭している。

チャンスだ。

ビーム発信機に触れる。すると、俺の中に様々な情報が流れ込み、これの特性を理解しようとする。

実はレッドフレームには、相手の武器を奪い、解析し、アンロックするという規格外のプログラムが積んである。その分、容量は大きいが、別に今回の任務に多くの武器はいらない。ビーム発信機の一つや二つ、余裕でインストールできる。

時間にして30秒くらいか。目の前の装置は消失し、レッドフレームの拡張領域に収納された。

これで、俺の任務は終了。

ややあつさりと終わったことに安堵しながらも、俺は研究室を後にするのだった……。

side・ヒメ・ヤマシロ

「……何だ、拍子抜けしちゃうわね。」

格納庫にいたのは、12・3人の男性技術者のみ。IS操縦者は一人もいなかつた。

これはラッキー！…と思つたけど、あいにく新型らしき影は一つも無し。そこにあつた3機のISは、すべて旧型のジンだけだった。

「…まあ、暴れるには十分ね。」

ゴキッ、ゴキッと肩を鳴らす。

そしてその場でストレッチ。屈伸、伸脚、上体起こし……と、矢継ぎ早に行い、体を温める。

「おい……何をやつてるんだ？」

その様子を見とがめられたのか、作業員の一人が無防備に私に近づいてくる。

……バカね。怪しい人物がいたら、まず発砲すべきでしょうが。それでもつて動けなくしてから正体を探る。少なくとも、私はそうやつてるわよ？

……苦情が来たから止めたけど。

男はなおも私に近づく。その表情は、私を怪しんでいるものではなく……むしろ、私の頭を心配するような表情だった。

正直、不愉快です。だから……

「凶がれ」

「ド、ゴス……」

強烈な延髄蹴りを放つ。

それだけで男は、声もあげずに倒れ伏した。

……なのに、何故か他の作業員は私に気付き、慌ただしく動き始める。

武器を取りに戻る者。私に接近する者。外部と連絡を取りうつとする者……。

まあ、関係ない。

全部潰すだけだ。

殴る。蹴る。飛んで、踏みつける。

私が手足を動かすたびに、人がバタバタ倒れていく。

気分は三国無双。この爽快感がたまらない。

「ばああああくねつ！ゴッド・フィンガアアアアアアアア！」

連絡を取ろうとしていた作業員をアイアンクローラーで締め付け、そのままコンソールに叩きつける。手加減したから、死んではないだろ？。

「これで、残りはあと一人。

「う、動くな！撃つぞ！－」

向こうで拳銃構えて震えてる、バカ一人だけだ。

「ねえ知ってる？『撃つぞ』って言う人は、たいてい撃つ気がないんだよ。」

「つるさい！撃つぞ、この豆しば！」

「カツチーン！いいわ、ぬるぬる動いてあげる！ホラ、撃つてみなさいよ！」

「ぐ、くそう！俺に撃たせやがって！－」

パアン！

三下っぽいセリフと共に、銃弾が放たれる。

……的外れの方向に飛んでいくかと思ったら、案外いい狙いね。このままだつたら右腕辺りに直撃するんじゃないかしら。
でも、黙つてやられる訳にはいかない。私は腕をスッと動かし、銃弾が通り過ぎた直後に元に位置に戻す。

「ば……馬鹿な。銃弾がすり抜けただと……？」

「あら、あなたにはそう見えたの？トロいわね。じゃあ……」

次は、こっちの番よ。

近くにあつたコンピュータを両手でつかみ、持ち上げる。
繋がっていたコード類はすべて力任せに引きちぎり、刺さっていた整備兵は振り払い、頭の高さまでリフトアップ。

「な……化け物……。」

「化け物……？」

何よ、こんなかよわい乙女（心は常に20歳）に向かつて、その言
い草は。

失礼しちゃうわね、ホントに。私は、化け物なんかじゃないわ。

「違つ、私は悪魔だ！」

コンピュータを放り投げる。狙いはあいつの足下。……さすがに、
死人は出したくないしね。

「ひ……ひいいいい！！」

男は腰を抜かし、地面にへたり込む。
それでも意識を保つてるのは、プロとしての意地かしらね。

「じゃ、眠りなさい。」

決め技は、ドロップキック。これで、格納庫は制圧した。

「……って、制圧？陽動が目的だったのに、やり過ぎちゃったわね。

こうなつたら、自分で警報機でも押してやるつかしら……と考え、
格納庫をうろつく。

そして 気付いた。

「……これ、IS用のハンガー？何で空っぽなのかしら……？」

side・ヒツヤ・ヤマジロ

(句で……。)

上手くいっていたはずだった。

ビーム発信機は強奪し、後は逃げるだけ。そのままだった。

(句で、こんなところにH.I.Sがいるんだよー。)

そつ。俺の皿の前には、見たことのないH.I.Sが立ひふさがっていた。

青、白、赤の三色に彩られた、全身装甲のH.I.S。
その両手にはアーマーシュノナイダーが握られ、黄色いデュアルアイ
が、俺を射抜くように見ていた。

(どうこうことだ……。新型は一機だけのはずだ……。)

冷や汗が流れる。もはやここまで。

かつて味わったことのない、凄まじい危機感が、俺を押しつぶそう
としていた。

「観念しなさい、産業スパイ。盗んだものを返すなら、命まではと
らないわ。」

「……」の声……ハイマーさん！？

なんてこいつた！てっきり、式典の方に行つたと思つたのに……。

まずいことになった。

彼女は、Ζ・G・Iでもトップクラスの実力を持つている。それが新型で出てくるとなると、その戦力は予想が出来ない……！

「だんまりかしら？なら……」

『警告！敵機、火器管制の起動を確認！』

「手足の5・6本は貰つていくわよ……」

そんなにねえよ！-というシッコミは呑み込み、俺はその場から飛びのぐ。

瞬間、敵機の頭部から銃弾が連射され、床に弾痕を刻みつけた。

「ふうん、やるわね。じゃ、次は格闘戦よ！」

敵はナイフを構え、脚のスラスターを吹かし、一歩一歩に接近する。

[冗談じゃねえ！こんなところで、死ねるかよ！-]

(8、閃光弾！)

『スタンバイ済みだ！』

右手の平に小型のグレネードが出現する。

ピンは既に抜かれていたそれを、俺は足下に転がし、全力で踏みつける！

カツ！-！

強烈な閃光が巻き起こり、俺と敵機の視界を潰す。

『閃光弾、追加だ！』

さうにも一つ。逃げる方向と、その逆に投げ捨て、一気に駆けだす！

逃げ切れるとは思えない。だからせめて、手に入れたコイツだけは引き渡さねえと……。

「 甘いわね。」

ブゥン。

何も見えないはずの光の中。田のよくなーつの光が、確かに俺を見た……気がした。

全力で前に飛びのぐ。

ガキン！という金属音。

おそれくはアーマーシュナイダー。

……殺される！！

「逃げられると思ったの？」のストライクから…

敵が迫る。俺は逃げる。

でも、無理だ。逃げられるわけがない。

そもそも、生身で工の相手をするなど不可能だ。敵は機械で、こつちは普通とちょっと違つだけの人間。

『どうする？』
（だめだ！俺じゃ勝てねえ！）

まさに絶体絶命。ナイフを手に俺に迫るストライクが、死が、ゆつくりと近づき

唐突に、その脚を止めた。

ビゴォオオオン！！

そして、響く爆音。

振りかえると、俺とストライクとの間には、大きな緑色の柱が出現していた。

「ツーこれは……ビーム！？ビームから……」

「ロロダ。」

そして穴から飛び出す、一機のI.S.。そこにいたのは灰色の全身装甲で身を固めた、トサカを持つ鎧武者……N.G.I-1017・ジンだった。

その両手に構えられたのは、ジン以上の大きさを持つ、長大なビーム砲であった。

「くつ……バルデュス……。」

「ニガシテモラウゾ。」

そう言つや否や、ジンはビーム砲を再び構え、ストライクに向けて発砲する。

施設の被害など考へない、強力無比な一撃。

対するストライクに回避の余地は無く、とっさに呼び出した赤いアンチ・ビーム・シールドで防御する。

「……」
「……」

ジンから、機械的な音声が発せられる。

その声……音程こそ変えているけど、間違いない！母さんだ！

（…ありがとう、母さん…）

爆音を背後に聞きながら、俺はローラーブームを開いて一気に逃げ出した……。

その後の話をしよう。

母さんは施設への無差別攻撃を行い、ストライクは防戦一方。

……完全に悪役の戦い方だよね。一般人を人質にとるなんて、や。

まあ、その混乱に乗じて俺は逃げ出し、母さんもジンを自爆させてから逃げたみたい。

……さすがにコアは盗まなかつたよ？そんなことしたら、絶対に足が着くし。

そして騒ぎを聞きつけ、デュエルが戻ってきた頃には俺達の姿は既に無く。

空港が封鎖される前に、堂々と、国外への脱出に成功したのであつた……。

こうして、モルゲンレー^テはビーム技術を手に入れた。
生産されたビームライフルはMBFの装備として登録され、MBF
はASTRAYと名を改めることになる。

そしてこの4ヶ月後。物語は大きく動き出すのであった……。

過去編その2 ヒーム強奪事件（後書き）

これが、本編の四か月前の出来事。

この頃、まだデュエルとストライク以外のXナンバーは開発されてなかつたんだ……。

格納庫にあつた3機のジンのコアは、そのままXナンバーに転用。そして完成し、テストが行われたのが一か月前。

そして……あの事件が起こつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0846v/>

ISV～RED&BLUE外伝～

2011年11月5日19時34分発行